

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 加野 泉

論文題目 承認の境界—アメリカ・ヘッドスタートの家族支援—

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	田所	光男
委 員	名古屋大学教授	水戸	博之
委 員	名古屋大学准教授	新井	美佐子
委 員	名古屋大学准教授	上村	泰裕
委 員	名古屋大学名誉教授	越智	和弘

本論文の概要

本論文はアクセル・ホネットの承認論を理論的な枠組みに取りアメリカ・ヘッドスタートに関わる公文書資料を検討することを通して、子育てにおける文化と親役割の多様な在り方がこの政策によって秩序づけられ、規範化されていくことを批判的に解明するものである。

1965年に誕生したヘッドスタートは、公民権運動で獲得された法の下での平等だけでは十分に達成するのが難しい教育や経済における平等を、貧困層の人々が自助によって獲得できるように支援するために、連邦政府が導入した就学前教育政策である。貧困層の子どもが、学校でほかの子どもと肩を並べられるようにするために、ヘッドスタートは子どもだけではなく家族全体を包括的に支援することを大きな特徴としている。当時のアメリカの他の補償教育が文化の序列を明確に意識し、白人中流層の文化を貧困層に与えるという態度をとっていたのに対し、ヘッドスタートの家族支援は、文化の差異を相対主義的に捉えて差異を尊重するという方針を計画当初から持ち、現在も多文化主義の理念の下でそれは維持されてきている。

しかし、こうした政府側からの尊重や配慮は中立的とみられる基準を示す一方で、支援を受ける対象者には社会における承認の条件を内面化させる側面があることをホネットは指摘し、これを「イデオロギーとしての承認」と名付けた。本論文は家族支援が有する社会的承認のための条件提示の機能に着目して、現代のアメリカにおける親と子の承認の条件を明らかにする。そのため、次の4つの方向からヘッドスタートの公刊文書を検討する。(1) 子どもの到達目標、(2) 親の果たす役割、(3) 参加者の文化的差異の尊重の境界、(4) 父親役割の導入。ホネットの承認論は、法による承認、愛による承認、連帯による承認がすべて達成されて社会的承認が完成すると見るが、本論文は上記4つの角度からの検討をもとに、親と子がアメリカ社会において連帯による承認を得るために提示される条件の解明を試みる。

本論文は序章を含めて7章から構成されている。

序章では、問題の背景を説明したのち、先行研究を踏まえて承認論を用いてヘッドスタートを検討する意義を述べ、上記の四課題を提示する。

第1章「法による承認に向けて—「アメリカ人」と他者—」では、ヘッドスタートの誕生に至るまでのアメリカの歴史の中で、「アメリカ人」に対する差異がどのように扱われてきたのかを検討するため、1790年センサスの「その他」区分の1960年までの表記の変遷と、その背景事情について、二次資料をもとに整理する。これにより、アメリカはセンサスの「その他」区分の「他者」たちを経済活動の必要に応じて受け入れたり排除したりする、管理のために使ってきたことを確認する。

第2章「ヘッドスタートの理念」では、1964年から65年のヘッドスタート計画委員会において、過去に長期にわたってアメリカの「他者」であった人々に何を支援することで包摂が可能になると考えられたのかについて、計画委員会の一員であった心理学者エドワード・ジグラの回顧録を中心に検討する。本章の検討によって、計画時にヘッドスタート委員会は、栄養や健康面の問題のほか、不利な条件にある子どもたちの自尊感情の欠如を大きな問題と見てお

り、貧困の中に育つ子どもは自己を信頼する意識の低さから学校や社会における目標達成ができないと考えられていたことを明らかにする。また、実際のプログラムは計画委員の想定よりもはるかに大規模で実施された上に、短期に結果を測定することを目的に白人中流階級の文化が反映された I Q テストがプログラムの評価判定に用いられたため、1980 年代まで長期にわたり参加者の文化的な背景が考慮されないままプログラムが実施される状態が続いてきたことも論じる。

第 3 章「子どもの就学準備とは何か」では、上述した検討課題（1）子どもの到達目標について、クリントン政権下でヘッドスタートの質的な改革が実施された際の諮問委員会答申と、現在までの実際の子どもの達成度を評価する指標の変遷とを検討する。この検討によって、1990 年代前半に子どもの達成目標として、周囲の人と友好的で協力しあえる関係性を保ち、自信を持つという「社会的能力」が設定されたのち、続くブッシュ政権では、識字や数学、科学の知識を重視するように指標が変更され、その後、オバマ政権では、学力面では「世界水準」を目指すスタンダードの確立のために、子どもの能力の達成目標がより高度化、細分化されることを明らかにする。また、「社会情緒面」では、2000 年代初頭には、子ども自身が達成したと信じられる機会を増やして自信をつけさせることが重視されていたのに対して、近年では子どもに感情を抑制させ、問題や衝突を生じさせない方向へと重点が移されていることを解明する。こうして本章では、ヘッドスタートの子どもたちは、集団生活の中で問題行動を起こさない感情のコントロール能力と、国際的に引けをとらない水準の高い認知、識字能力を 5 歳時点において身につけていることを、「連帯による承認」を得る条件として求められていることを考察する。

第 4 章「承認される文化の境界線—ヘッドスタートの多文化主義—」では、課題（3）参加者の文化的差異の尊重の境界について、連邦政府が発行した「ヘッドスタート多文化主義理念」を検討することを通して、ヘッドスタート参加者の文化的差異の尊重はヘッドスタートの達成基準に基づいて判断される「発達上の利益」に供するか否かという判断によって、尊重されるものとされないものの境界線が引かれることを明らかにする。参加者の文化的差異が尊重されるのは、子どもの発達の成果指標に到達するまでの過程で文化的な配慮が参加児童の発達を促進すると見込まれる場合と、参加者の発達が基準に到達しているか否かの判断の際に限られている。参加者の文化の尊重を優先することで基準への到達が遅れると予測される場合は、「発達上の利益」を説明するという「配慮」がなされるが、参加者の文化は選択されない。本論文は、ヘッドスタートが「その家庭が選択している」文化を広く尊重する多文化主義理念を定めながらも、達成基準に示される目標への到達しやすさを優先する「発達上の利益」という論拠で承認の境界を定めていることを考察する。

第 5 章「家族の役割は何か」では、まず検討課題（2）親の果たす役割について、ヘッドスタートの家族支援プログラム構築の際に参照される最新のガイドラインを検討する。そこでは、親の役割として家族の安全と健康を守り経済的保障をすること、子どもの発達を促して学習を

サポートし学習環境の移行期には子どもの発達状況も考慮してサポートすること、家族にとって支援的で教育的なネットワークづくりをすることが挙げられており、これらの役割を遂行する能力をつけるために、親も学び続けることが求められていることを明らかにする。ヘッドスタートでは家族がこれらの役割を果たすことで、アメリカ社会において親としての「承認」を得られると想定されている。この家族支援のガイドラインでは、ヘッドスタートの多文化主義理念のもと、親役割を果たすのは家族の中の誰であってもよく、性を区別せず多様性が幅広く認められている。また、課題の(4)父親役割の導入について、1990年代半ばの福祉改革と連動して導入された父親プログラムにかかわる政府発行のヘッドスタート広報、プログラム評価報告、プログラム構築のためのガイド資料を用いて、家庭内のジェンダー役割が再構築される過程を検討する。こうして、第4章で文化的配慮の境界を定めていることが明らかになった「発達上の利益」という論拠が、親を性別に基づいた子育て役割に導いていることを考察する。1990年代から開始されたヘッドスタートの父親プログラムは、子どもとのかかわり方は男女で異なっており、両親の相補的なかかわりが子どもの健全な発達に有益であるという学術的な知見を根拠に、子どもに対して男性ならではの接し方をする父親像を提示しているのである。

終章では、参加者の文化よりも優先され、家庭内の親役割をも規定する「発達上の利益」が、白人中流層を主な対象とする調査による「学術上の根拠」によって定められていることを明らかにするとともに、2000年代に入ってから西洋の伝統に基づいて、性によって異なる親役割が強調されていること、プログラムの成果を点数化し、ヘッドスタート同士を競争させるという評価の取り組みによって、子どもの「承認の条件」が細分化され水準が引き上げられていることを明らかにする。

本論文は全体として、ヘッドスタートが多文化主義を理念として掲げ、家族の選択する文化とジェンダーの別を問わない幅広い家族像を尊重することを公の方針としながらも、実践を規定する際には、子どもの「発達上の利益」を論拠に、文化の尊重の範囲を限定し、性別に応じて分化した親役割を承認のための条件として提示していることを解明する。またその論拠とされる子どもの「発達上の利益」が、これまでの学術研究で「利益」と判定されたものに依拠しており、政府側はそれらの研究者も対象者も「白人ミドルクラス」に偏りがちであることを認識しながらも、「発達上の利益」に供しないと判断される文化を承認の対象から外していることを明らかにする。こうして本論文は、ヘッドスタートを承認の境界の事例として検討することを通して、「中立的」とされる科学的裏付けへの依拠が、家族支援の場で多様な文化を価値づけし、新たな秩序を構築していく過程であることを解明する。

本論文の評価

子どもの教育や貧困は決して南北問題に限られたテーマではなく、いわゆる先進諸国においても、社会的に不利な状況下に置かれた子どもたちをどのように救済して行くのかはきわめて切実な課題として、様々な社会政策が講じられてきている。本論文はアメリカ合衆国におけるそうした取り組みの中から、就学前教育政策である「ヘッドスタート」を取り上げ、その問題

点を社会的承認論に基づいて解明したものである。本論文の何よりの独創性は、この政策の検討に際して「子育て」という視角を取って、支援を受ける当事者の置かれた多次元的な状況を視野に入れることができたことにある。こうして多様な被支援家族の文化背景という重要な次元が析出され、ここから承認の限界を批判的に考察することが可能となったのである。ヘッドスタートに関する研究は、従来、その政策の効果の測定に焦点が当てられることが多かったが、本論文は、政策の基盤を成している文化認識を解明することで、政策が実施される中で、被支援家族がどのような文化へと成型されて行くのかを明らかにして、きわめて貴重な貢献となっている。

この総括的な評価は、以下、三点の高い評価項目に分析して説明できる。

第一に、社会学の分野で世界的に注目を集め続けている承認論、とりわけアクセル・ホネットの承認論をヘッドスタートの分析に応用し、「連帯」レベルでの承認を詳細に検討して、この制度の包括作用とその限界を解明できた。

第二に、本論文が最終的に把握した上述の限界とは「発達上の利益」という基準である。この社会政策はもともと、諸文化の多様性という状況を直視して、それを積極的に許容する方向で開始され、またその後の改革でもこの方向は理念的には維持されてきてはいるが、最終的に統合が問題になる場面では、諸文化のヒエラルキーは維持され、同化主義的解決とほぼ同様な政策となっていることを明らかにできた。

第三に、1990年代において、家庭内における父親の役割を重視する方向へとヘッドスタート政策が変化を遂げたことを分析して、それが白人中間層のジェンダー規範の導入となっていることを解明できた。

審査の中でいくつか疑義も提出された。分析装置として採用されたホネットの承認論それ自身が必ずしも整備された理論とは言えず、やはりその問題性についてもっと議論を展開すべきであった、また、文化という概念の規定や、ジェンダーあるいはジェンダー研究の本質についてもっと綿密な考察が必要であった、等々である。しかしそれらも、本論文全体の評価を損なうものではなく、今後の研究の展開に期待することとした。

本論文は全体として、公開されている公文書を対象に分析したものであるが、資料編として、カリフォルニア州ロサンゼルス市及び周辺地域において実施されているヘッドスタート施設を加野氏が訪問調査した観察記録も補遺として付されている。加野氏はその際インタビューも行っているが様々な手続きをクリアできず正式に論文に組み入れることができなかった。しかし実際に訪問しての観察は、本論文の立論や批判的視座を支えるのに重要な役割を果たしていることが窺われ、今後、本格的なフィールドワークを展開することで、ヘッドスタートの強みと弱みを、いっそう明確に解明することができるであろう。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が課程博士学位（学術）を授与されるに値するものであると判断した。